

重度・重複障害幼児の集団療育（5）

— 父親の療育参加をめぐる —

後藤 秀 爾¹⁾ 村上 英 治 森 崎 康 宣²⁾
加藤 礼 子³⁾ 中西 由 里⁴⁾ 水 野 博 文⁵⁾

I 問題の所在と目的

重度重複障害幼児との集団療育は、対象となった子どもと、その親と、そこにかかわる療育者との相互成長の場に他ならない。そうした視点に立ってのこれまでの報告（譲・村上ら 1980・a, 後藤・村上ら 1980・b, 後藤・村上ら 1981等）は、昨年、“障害重い子どもたち——集団療育の場で——”と題して、福村出版より公刊されている（村上・後藤編 1982）。さらに、その展開として、障害児のきょうだいの発達に視点を置いての報告（後藤・村上ら 1982・a）、母親の成長にからむ要因を視点としての事例報告（後藤・村上ら 1982・b）によって、障害児をとりまく対人状況全体を視野に入れてのアプローチの方向を模索してきた。当面、私どもの課題とされているものは、ひとつのまとまりと力動を持った家族全体への発達援助のあり方を明確にすることであり、今回の報告の主題である父親へのアプローチの問題は、特にその中でも今日重要な観点となっている。

Finnie, N.R. (1974) も, Dorman, G. (1974) も脳性マヒ児の療育における両親の役割を高く評価している。西村 (1979) においても、両親間の和から生ずる“家庭の平穏”が障害児の発達促進のため不可欠である

* 本論文の要旨は、東海心理学会第32回大会において発表された。また、金沢俊文（いこいの家）、粟田順子（名大研究生）の両名も、療育担当者として参加し、本研究をすすめるにあたって、その協力を得たことを付記しておく。

- 1) 愛知学泉女子短期大学講師
- 2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期）
- 3) 名古屋大学臨床心理相談室
- 4) 名古屋大学大学院研究生
- 5) 名東ワークス

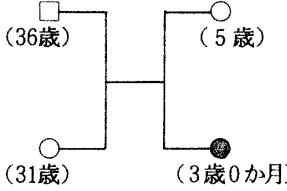
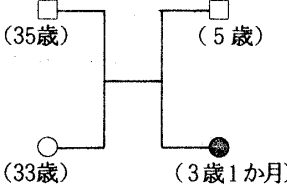
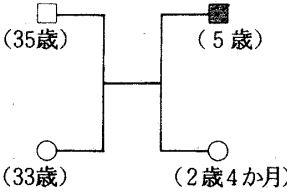
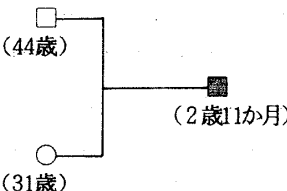
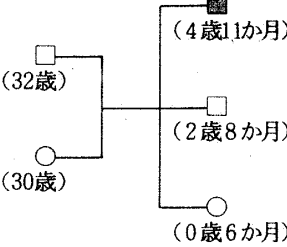
ことを、事例の中で説いている。重度の脳損傷児との親の取り組みを描いたネイソン夫妻の手記の中では (Nason, M. & D. 1974), 両親の協力し、支え合う姿を読みとることができる。向野 (1978) の中に登場する脳性マヒ児やっちゃんの父親は、“直接面倒を見てやれんので”, “やっちゃんが学校へ連れていってもらえるように, お父ちゃんは, 一生懸命働くからな”と決意する。

若干の文化差を考慮するならば、我が国では、やっちゃんの父親のように、直接には障害児とかかわることなく、母子のかかわりを側面援助するのみずからの役割と認識している父親像が、比較的常識的なものであるように思われる。両親が協力して、障害児の療育にあたるのを当然とするような、欧米の発想とは、少々趣を異にしているとの印象は否定できない。私どもの先の報告においても、（後藤・村上ら, 1980・b, 1982・b）母親の認識する父親像は、初期において、子どもの介護を安心して任せておけない、いわば当てにならない存在とされることが多かった。しかし一方で、家族力動が好転し、子どもの発達の場合が豊かになっていくためには、両親間の協力、調和の関係の確立が、その契機となることもまた否定できない事実として指摘することができる。

私どもの昭和56年度の療育実践に1年間、加わってきたサユリの父親は、その年度の療育の終結間近に、“障害児を持つ父親としての役割”と題する一文を、連絡ノートに書き記している。その中で、サユリの父親が指摘した点は、第1に、“母親の労力軽減に、積極的に取り組み、夜の時間帯は、父親が障害児とコミュニケーションを持つこと”, 第2に、“父親としての役割, 母親としての役割という立場をおたがいに認識すること。母親の愛情は子どもにとって非常に大切なものであり、直接子どもにかかわる主体は母親であるが、一方父親は、もっと大所高所に立って家庭を見ていかねばならない”, そして、第3に、“障害児を持ったというハンディは、

重度・重複障害幼児の集団療育（5）

表1 療育対象児（障害児）の概要（S. 57. 5. 現在）

障害児名	家族構成	障 害
ノブコ		<p>出産時、臍たいてん絡で、数分の仮死。特に、保育器等の使用はないが、生後1か月より、ミルクを飲まなくなり、反応が乏しいなどで、母親は異常を感じている。5か月時に入院して検査。入院中にてんかんの発作が始まる。現在、薬で、大発作はおさまっているが、数秒間の小発作は、残っている。小頭症。発達水準は、おおよそ1～2か月程度のところ。食事の自力摂取ができず、鼻からの経管栄養。背骨の側湾があるため、股関節脱臼がある。全身の筋肉に力がないため、うつぶせ姿勢でも、首がおこせない。表情は、割とニコニコしていることもある。タンを吸い取る吸引機が、必需品。もっか、食事時には、一回にスプーン数杯ずつ、口からミルクを飲む練習中。腰と首の筋肉をつけるため、座位、うつぶせ姿勢の保持に、心掛けている。家では、日光浴以外には、外へつれてでる機会もない。</p>
マキコ		<p>出生時、臍たいてん絡で、仮死産。ミルクが飲めず、栄養補給のため、コロニー入院。以来、ずっと、てんかん発作。難治性てんかんと診断を受けている。鼻からの経管栄養。発達水準は、1～3か月程度。ミルクだけの食事の割に、体は大きい。首、手、足に、筋張性のマヒがあって、かたい。首は、むしろ上向く形で、固定しているため、うつぶせにすると、頭を支えられる感じになる。最近、寝がえりができるようになった。チューブも、できるはずして食事できる方向での努力を、このところ始め、スプーンでスプーン等飲ませているが、まだ、うまく飲み下せない。表情、反応性も、かなり乏しい印象が強い。</p>
マサヒコ		<p>生後すぐ、ダウン症の診断を受ける。6～7か月頃から、點頭てんかんの発作が始まり、現在も継続。現在、1日1～2回に落ち着いている。病気にかかりやすく、かかると、すぐ重くなり、食欲がおちて、やせてしまう。発達水準は、おおよそ5～8か月程度。現在のところ、一応不安定ながら座位のとれる唯一の対象児。このところ動きも活発になりつつあり、ハイハイができた。まだ、表情に乏しいところ、自発活動の力の弱い所等を感じるが、やせていた体が、太って来ている。</p>
ヨシフミ		<p>出生後、3か月までは、特に異常なし。3か月で、全身の強直発作を起こして7か月間入院。1歳時に、保健衛生大にて脳腫瘍の手術。同時に、脳室から胸部へ至るシャントを通す。現在も、月1回位の大発作、毎日の顔面運動の発作がある（レノックス？）。発達水準は1～4月程度。これまで、ずっと入院生活が多かったが、このところ、ようやく、安定してきて、家に居られるためか、首が、しっかりしてきて、感情も出はじめている。うつぶせで、心もち、頭を上げ、振り回されると笑ったりする。抱かれていることが好き。食事はミルクばかり。</p>
タカヒロ		<p>出生後、すぐ、連鎖状球菌の感染症にかかり、つづいて肺炎を伴う敗血症にて、40日間入院。以後、コロニー受診。1歳6か月で、脳性マヒの診断。わかくさ学園にて、リハビリも、受けている。MRグループは、昨年度より引続いての参加。全身にかなり強い緊張性のマヒがあり、発達水準は、2～4か月程度。難聴の疑いがあり、音刺激への反応性は弱いが、接触刺激に対しては、泣いたり、笑ったりの反応がみられる。食事は、パンがゆが多く、かなりの量を食べるが、身体の方は、少しも太ってこない。定首、寝返りもまだ。腸のぜん動運動も弱く、便秘がち。</p>

裏返せば、それだけ自分が鍛えられていると知り、もっともっと良い面に目を向けて、前向きに生きること。親の精神状態が良くなれば、子どもにも反映してくる”といった3点である。この指摘は、父親と母親が、障害児の存在を介して、新たなパートナーシップを模索し、確立していくことこそが、障害児を持った両親の第1の課題であり、またそれは、両親がそれぞれに自分の生き方を問い直す中から生まれてくるものであることを、私どもに改めて認識させてくれる。私どもは、障害児の父親とは、かくあらねばならぬと、固定的にその役割を想定しているものではない。むしろ、それぞれの両親が、個別的・現実的に、それぞれの立場においてパートナーシップをこのように再確立していくことこそが重要であると考え。

従って今年度は、私ども自身も、父親への働きかけの問題を、重点課題として位置づけ、また対象となった5人の父親も、そうした私どもの動きにこたえて、きわめて協力的な姿勢を示し、療育活動にも折にふれ、積極的に参加をしてきた。その中で、私どもも、さまざまな形で、父親の口から直接にその考えに触れる機会を得た。この時点において、私どもは、こうした父親へのアプローチの基本姿勢とその方策とを、ある程度、明確にしておくことが必要であると考え、今回の報告では、この視点に立つての昭和57年度、1年間の実践活動を中心に検討してきたものを提起したいと考える。

II 父親へのアプローチの概略

昭和57年度1年間の療育対象児は、表1に示す5名である。タカヒロのみは、先年度からの継続であるが、他の4名は、この年度の4月に受理面接を行なって、5月から療育を開始した子どもたちである。

子どもたち、ひとりずつに対し、従来同様、主たる担当者を定め、また、そのきょうだいへの対応と、全体の

リーダー役として1名を加え、子どもグループの療育には計6名が、あたった。母親グループの話し合いには、別にまた1名が、加わって、グループカウンセリング的展開をはかっている。

そうした態勢で、日常的には、週1回3時間の母子通所形態での療育活動を行なってきた。原則的なスケジュールは、表2に示すごとくである。

父親に対しては、7月の末に行なう一泊合宿での海水浴、12月中の日曜日を1日使って行なうクリスマス会、3月に行なう年度の終了会の折などに、家族ぐるみの参加を求めるという形で、出席を要請してきた。他にも、8月の夏休み中に行なう家庭訪問、療育に対する意見や感想を求める質問紙調査などへの協力も、積極的に求めてきた。(表3参照)

受理面接の段階から、母親と共に来所してきたヨシフミ、マサヒコの父親のように、はじめから協力的な姿勢を示す父親もいたが、他は、療育開始当初では、母親から聞く話や、母親の態度、表情の変化などから、参加の気持ちを抱きはじめ、一泊合宿の時から、直接顔を見せるようになっていく。その合宿を契機として、それに続く家庭訪問、その後の質問紙などへも協力的態度を示し、私どもの療育活動に対する理解と参加の姿勢を深めていくことができてきたように思われる。父親自身に、私どもの療育活動の雰囲気や、そのまま直接体験的に理解してもらい、子どもを介して家族全体の成長とつきあっていこうとしている私どもの療育姿勢を伝え、父親自身の希望や意見を語ってもらい、さらに療育者を交えての父親同士の話し合いの場を作るような配慮を行なうことは、その時々、私どもが心掛けてきた点である。

具体的に、この年度は、一泊合宿に、タカヒロの家族を除いた4家族全員が参加してきた。タカヒロの家族は、母親の病氣と、父親の仕事の都合から、参加できなかったものである。4家族とも、障害児を連れての外泊、

表2 日常療育スケジュール(毎週1回母子通所形態による)

a) 子どもグループ		b) 母親グループ	
10:00	来棟	10:00	来棟(母子分離)
10:00 ~ 10:30	出席調べ(シールはり)	10:00 ~ 11:00	母親グループでの話し合い
10:30 ~ 11:00	設定遊び	11:00 ~ 11:30	子どもの食事の準備
11:00 ~ 11:30	自由遊び	11:30 ~ 12:30	母親の食事(子どもと別に)
11:30 ~ 12:20	食事	12:30 ~ 12:45	後片づけ
12:20 ~ 12:50	連絡ノート記入, 自由遊び	12:45 ~ 13:00	情報交換, 連絡等
12:50 ~ 13:00	終りの挨拶	13:00	離棟
13:00	離棟		

表3 父親の療育参加状況

インタビュー面接（4月）	ヨシフミ，マサヒコの父親の自発参加
夏合宿〔1泊の海水浴〕（7月）	ヨシフミ，マサヒコ，ノブコ，マキコ一家そろって参加 タカヒロの一家不参加。（前年度は父親と子どものみ参加） 〔終了後，合宿についての質問紙依頼——父，母ともにすべて回収〕
家庭訪問（8月）	全家庭において父親在宅
クリスマス会〔日曜日を使っ ての1日療育〕（12月）	ヨシフミ，マキコ，タカヒロの一家そろって参加 ノブコの父親欠席 マサヒコの一家欠席
終了式〔日曜日の午後〕（3月）	全家庭において一家そろっての参加 〔1年間を振り返っての質問紙依頼——父，母ともにすべて回収〕

それも海水浴は、初めての体験となったため、特に母親は、それを楽しみにして、父親の参加を強力に求めたようであった。第1日目に海でひとしきり遊んだ後の夕食の後には、ビールを飲みかわしながらの全員での話し合いからはじまり、次第に、父親は父親同士、母親は母親同士のグループでの話し合いへと移っていき、夜明け近くまで、話しがはずんでいった。父親の話の中では、わが子が障害児とわかった時の心境や、現在の障害の状態に対する気持ちなどが、それぞれに語られて、きわめて印象的であった。

その後、8月中に、5家族の家庭訪問を行ってきたが、全家庭において、父親も母親とともに療育者の来訪を迎え、自分たちの家庭のありのままの日常の姿を見てもらいたいとして、気楽な受容的雰囲気の中での対話が、すすめられた。

クリスマス会は、療育者と、参加の4家族とが、共に役割分担をして、朝から自分たちの手で準備を行ない、夕刻まで、なごやかな集まりを持つことができた。ヨシフミの父親は、自慢の料理に腕をふるい、タカヒロの父親は、得意のカラオケを率先して歌い、マキコの父親が、「我が家の3大ニュース」を披露するなど、それぞれの持ち味を生かした父親の活躍が目についた。

終了の会には、5家族のすべてが参加して、それぞれに父親が一家を代表してこの1年間の総括を語ってくれた。その後に依頼した質問紙にも、熱心な回答が寄せられ、私どもも、次年度にむけての確かな手応えを感じさせられている。

III 父親へのアプローチの基本方針

当初は、父親の療育参加への意欲、意識を高めること自体に、主題を置かねばならないことが多い。その段階

で、父親に対して直接働きかけることは、あまり生産的ではないが、母親を介して、間接的な形ででも、療育グループ及びその活動の肯定的な側面の評価を得ることは、効果をもたらすことが多い。

療育グループの活動に、参加してきた父親は、その段階からは、直接体験的に、療育グループの影響を受けはじめることになる。その際の基本的な視点は、先に述べたように、障害児の存在を介して、そのきょうだいをも含めて、両親が、新たにパートナーシップを作り上げていくための状況を準備することにある。具体的に、私どもの父親へのアプローチにおける基本的なねらいは、次の3点に要約することができる。

- ①父親役割の自覚；重度の障害児を持つ父親としての自己の立場の受容と、その果すべき役割への自覚。
- ②父親としての役割行動への理解の深まり；母と子が、真に必要としている体験や、父親に求められている援助への気付き。
- ③家族力動変容のきっかけ；上記2点を通してなされる父親の姿勢の変化を、母親がうけとめて、夫婦関係、家族力動が安定化へと動く。

IV 5人の父親の意識の変容過程

1 父親自身の意識の変容過程

表4は、1年間の療育活動を終了した3月の段階で、父親に依頼した質問紙への回答を軸にして、他の機会に得られた父親の発言をも参考にしながら、その障害児に対する意識の変容過程をあとづけたものである。質問紙自体は、選択肢を多くして、回答し易いものとし、それを補う意味で自由記述の部分を作っている。

表4のa)は、父親が子どもの障害を知った時の状況と、その時の気持ちの動きについてたずねた部分のまと

めである。

表4のb)は、私どもの療育グループに母と子が参加するにあたっての、父親自身のうけとめ、さらに、自分自身が参加することを決めるまでのいきさつ、そして実際に参加してみてもの手応えなどをたずねた部分をまとめたものである。

表4のc)は、調査時点での子どもに対するうけとめ方、家庭内での自身の役割意識についてたずねた部分のまとめである。

ノブコの父親の場合

ノブコが生まれた時から、その首から上が紫色であったため予感ではしていたものの、はっきりと障害児であり治療の方法がないということを知られた時には、激しいショックを受け、「何故、私たちに障害児が生まれた

のだろう、ノブコに何が起こったのだろうと、何回も何回も考えた」ということである。しかし、「とにかく、この子を生きさせねばと思った」父親は、自分よりも深いショックを受けているであろう母親の支えとなることと考えるに至っている。

ノブコが生まれてから、ハングライダーをやりはじめたという父親は、常に「ノブコのために死んじゃいけない」ということを、みずから確認するために、空を飛んでいるように思われる。ノブコのために、家を改造してサンルームを作ったり、洗濯場を広げたり、自家用車にノブコのための吸引器をとりつけるように改造したり、また入浴介助は自分の役割とするなど、自分の「複雑な気持ち」の整理は十分ついてはいないものの、ノブコの存在を受容する方向へと動いている。

療育グループに母子が通うことを決めたのは、そうし

表4 父親の障害児に対する意識変容過程

a) 療育グループに参加するまで

質問項目	ノブコの父親	マキコの父親	マサヒコの父親	ヨシフミの父親	タカヒロの父親
子どもの障害を知った時期	生まれて1年以内に子どもの様子から夫婦同じぐらいに知った。	生まれた直後に妻から知らされた。	生まれた直後に医者から夫婦に知らされた。	生まれて1年以内に妻が子どもの様子から知った。	生まれた直後に医者から妻より先に知らされた。
子どもの障害を知った時の気持ち	目の前が暗くなるほどのショックを受けた。障害の原因をいろいろ考えた。	薄々感じていたがショックは強かった。身辺自立できるようにしたいと先のことを考えた。	自分の子にちがいはなくなると気にならなかった。障害児であったことが自分のためにはよかったと思う。	神様から授かった自分達の子にちがいはなく、障害にはそれほどこだわらなかった。	絶望的にもなったが、生きようとする骨髄を分けた我子の回復を願った。
	妻のショックの方が、はるかに大きく深刻だった。			夫婦ともそれほどショックはなかった。	妻のショックの方がはるかに大きく深刻だった。
妻への心づかい	さりげなく、心の支えとなるよう考えた。	一緒に、これからのことを話し合った。	自分はショックでないことを伝えた。	さりげなく、心の支えとなるよう考えた。	将来のことを話し合ったり、慰め励ましたり、しっかりするよう促した。
障害を知る前の子どもへの気持ち	待望の子で、生まれて嬉しかった。	元気に育つか、期待と不安が半々。	特になかった。	どういう子に育てようかと楽しんでいた。	待望の子で、生まれて嬉しかった。
障害を知ってからの気持ちの変化	不憫で愛しさが増した。複雑な気持ちの変化だった。	基本的には、違ってはいない。	不憫で愛しさが増した。自身の名を与えた。	一層、大事な子だと思えた。	基本的には違っていないが、不憫で愛しが増し、また重荷に感じ憎くもあった。

重度・重複障害幼児の集団療育（5）

b) 療育グループへの参加について

質問項目	ノブコの父親	マキコの父親	マサヒコの父親	ヨシフミの父親	タカヒロの父親
グループへの参加を妻からどのように相談されたか	妻は参加を決意していたが、一応了解を求められた。			ふたりで、よく話し合ってから結論をだした。	一応、了解を求められた。
母子のグループ参加に対する受けとめ方（参加当初）	何をされるか疑問に思っていた。	何もしないより良いだろうぐらいに思っていた。	何もしないより良いし、少しでも発達につながることで、母子が人と接する機会がほしかった。	少しでも発達につながることを期待した。	何もしないより良いだろうぐらいに思っていた。
同上（現在）	大変、良いことだったと思う				
母子がグループ参加してよかった点	自分にとって間接的刺激となった。家庭がまとまってきた。	子どもの発達がみられた。妻の精神安定、成長に役だった。		グループの方々の生き方に接し、さわやかで清々しい経験をした。	自分にとって間接的刺激となった。家庭がまとまってきた。
父親のグループ参加の動機	妻が参加を求めたから。他の障害児、その両親との接触。	妻が参加を求めたから。		妻が参加を求めたから。	療育グループがどういう集まりなのかを確かめるため。妻が参加を求めたから。
グループに通うことによる母親の変化	たくましくなった（自立してきた）。精神的に安定した。積極的、行動的になった。明るくなった。	子どもの世話が上手になった。	明るくなった。	明るくなった。生き生きしてきた。	たくましくなった（自立してきた）。明るくなった。精神的に安定した。生き生きしてきた。疲れ気味になってきた。
父親にとってのグループ参加の体験の意味	気持ちの整理。グループに対する認識の変化。親同士知り合えて心強く感じた。この子がいても、いろんなことができるということを確認できた。子どものことを考える時間ができた。	親同士知り合えて、心強く感じた。妻子の新しい一面を発見できた。		グループに対する認識の変化。妻子の新しい一面を発見できた。親同士療育者との交流。	グループに対する認識の変化。親同士知り合えて心強く感じた。この子がいても、いろんなことができるということを確認できた。
療育グループの父親と家族への影響	父親の立場や責任を再認識する機会。この子の問題を共有できる仲間ができたという喜び。夫婦で話し合う機会が増えた。第3子をつくるきっかけ。	妻と子の知らない側面を見つけることができた。この子の問題を共有できる仲間ができたという喜び。家族全体が明るくなった。	「人の良心」に接してさわやかで、清々しい経験をした。	自分の人生観を考え直す機会。家庭が明るくなった。	父親の立場や責任を再認識する機会。この子の問題を共有できる仲間ができたという喜び。夫婦で話し合う機会が増えた。妻と子の知らない側面を見つけることができた。

c) 現在の心境

質問項目	ノブコ父親	マキコ父親	マサヒコ父親	ヨシフミ父親	タカヒロ父親
父親にとっての子どもの存在	苦しみの元凶。心の安らぎ。神の与えた試練。家庭の中心。なくてはならない存在。	家庭の中心。	神の与えた試練。普通の子と同じ。家庭の中心。	喜びの源泉。家中の宝物。心の安らぎ。	喜びの源泉。心の安らぎ。神の与えた試練。自分にとっての長男。
父親の家族に対する配慮と役割分担	できるだけ家にいる時間を多くとるようにしている。家族の気持ちが沈まないように明るく振舞う。家族での娯楽、外出に心掛ける。家事、育児の分担。妻のグチの聞き役。さり気なく手助け。	できるだけ家にいる時間を多くとるようにしている。話し合っ、気持ちの通じ合いを常に考える。家事、育児の分担。家族の行動の仕方を方向づける。将来の見通しを考える。	できるだけ経済基盤をしっかりとさせるように仕事に励む。意識して自然にしている。何かせねばならないことはわかるが、特に何もしていない。家の事は妻に任せている。家事、育児の分担。家族の行動の仕方を方向づける。	できるだけ家にいる時間を多くとるようにしている。家事、育児の分担。家族の行動の仕方を方向づける。妻のグチの聞き役。	できるだけ家にいる時間を多くとるようにしている。家族の気持ちが沈まないように明るく振舞う。話し合っ、気持ちの通じ合いを常に考える。家事、育児の分担。子どもへの接し方、訓練の仕方を妻に教えたり、常に励まして育児にあたるようにさせている。育児、家事は母親の仕事。父親は、母親がそれに専念できるように配慮する。将来の見通しを考える。妻のグチの聞き役。

た時期であり、「こんなノブコに何ができるのかわからず不安だった」ということである。しかし、そうはいうものの、グループに通うにつれ、母親が安定し、子どもが少しずつでも変化してくる様子にふれ、好意的な評価を寄せるようになっていく。ノブコ自身の変化・成長という点では物足りなさを感じずのもの、療育グループの日は、「お母さんのイキイキする日、忙しい日、食事の手をぬく日、車をとられる日」と、母親にとって意味のある体験となっていることを、全体に肯定的にとらえている。

そうした状況が伏線となって、夏の合宿には、母親に求められるままに、療育グループの様子を確認するという意味もあったと思われるが、参加している。その中で、療育者や、他の両親が、気軽にノブコを抱いてくれることに「ビックリし」、他の父親の話から、改めてノブコのことを考えさせられたといっている。また他にも同じ仲間のいることを、直接自分の目で見て元気が出たということを書いていく。

1年間の療育をふりかえってみれば、母子が療育グループに参加し、父親自身も参加することによって、ノブコ

のことを両親で話し合うことが多くなったという認識が第1にあげられている。また、第3子が出来たことについても、「もし療育グループが無ければ、作らなかったと思います」と、人生設計に前向きになれたことも指摘されている。

現在の心境については、「何か、私の気分で変わります。つじつまが合わないのです。喜びはありませんが、ノブコは、私にとって苦しみ、心の安らぎ、試練、家庭の中心で、何をすることも、ノブコ中心です。いない方が良いというのではなく、いなくてははいけないのです。ノブコが元気でなければならぬのです。それが喜びかも知れませんが」という形で、ノブコ存在の大きさを述べている。ノブコが存在することの肯定面、否定面とともに認識しながら、家事・育事については、母親の補佐的役割に徹しているように見受けられるノブコ父親である。

マキコ父親の場合

ノブコ父親の場合と同様、子どもの様子から予感していたものの、障害児とわかった時のショックは、や

はり強いものであったという。“とにかくやれるだけのことはやってやろう、何とか、毎日の生活で、自分のことができるようになってくれないか、そういうようにしてやりたいという気持ち”であったことを述懐している。その時点で、多少なりとも、マキコの今後の発達に期待を残してはいたが、父親自身は、みずからも述べているように、マキコと直接の接触を持つことをあまりしていない。母親に対して、指示や示唆を与える程度であったことがうかがわれる。

後に、父親が語ったように“自然流”を心がけてきたということであるが、“親子ともども引きこもりがち”な気持ちになることは否定できなかったようである。母子が療育グループに通いはじめた時も、それほど肯定的にはうけとめていたわけではないが、母親が安定し、父親に対してマキコのことで要求することも出てきて、マキコ自身にも、変化のきざしが見られたということで、療育グループへの関心を高めていったものとみなされる。そこで、母親に求められて、マキコとかかわる療育グループのスタッフや活動内容を一度見てみたいという気持ちから、夏の合宿にも参加してきたようである。

その合宿で、他の両親と知り合い、“子どものために一所懸命やってみえる様子”に触れ、その明るさに感動し、また、はじめてマキコを連れて外出したことで、自信と勇気をもてたことを、述べている。結局、1年の間に、“母親を通して、家族全体に明るさや刺激が伝わった”という点において、父親はグループ活動の意義をもっとも評価しているようである。

現時点においては、マキコの存在が、良くも悪くも家庭の中心であると感じており、やや理念的な水準にとどまるとの印象は残るものの、その肯定面を認めている。家庭内での役割としては、経済基盤のいない手として、将来への方向づけを行ないつつ、母親の家事、育児の手助けをすることを心掛けているということである。

マサヒコの父親の場合

出生後すぐに検査が行なわれ、医師から、マサヒコがダウン症であることをきかされている。母親は非常なショックを受け、3ヶ月位は泣いてばかりでいたという。父親の方は、母親とその両親の悲しみが強いを感じ、自分がしっかりしなければという意識が先に働いたということもあってか、さほどショックを感じなかったと述べている。むしろ、障害児を持って、これで自分も本当の小説家になれると思ったという水上勉の例に自分をたとえて、仕事や人生に対して、自分を“せっぱつまった状態”にして“活性化”しておくために、かえって良かったとさえも感じたと説明している。そして、自分には

それほどのショックではなかったと、母親に伝えることで、その立ち直りを支えようとする動きもしている。子どもの名前にも、自分の肉体の一部を受け継いだことを確認し、“何としてでも、生かしてやろう”との決意をこめて、父親自身の名前の一部を与えている。

療育グループへの参加の話が出た時も、母と子が“あらゆる機会をとらえて、家の外に出て、多くの人に接して欲しかった”として、積極的に後押ししており、受面接の時にも、それに続く第1回の療育の折にも、仕事の都合をつけて、姿を見せけている。夏合宿にも、父親の参加を当然のこととして出席しているが、それ以前にも、連絡ノートを通して、マサヒコへの接し方について、自分に対する指導をもしてほしいという事を書き寄せてもしている。1年間を通してみれば、マサヒコの成長も、“私たち家族にとって、マサヒコという子どもを通じて初めて社会に接することができたこと”が、何よりの意義であったと指摘している父親である。

父親自身がグループに参加することによって、こうした子どもの場合、母親は育児、父親は外で仕事という役割分担だけでは不十分であり、父親も、まわりの社会も含めて、“トータルな接触が必要であること”を気付くに至ったと述べている。現在は、マサヒコの存在を、つとめて自然にうけとめ、前向きに生活設計をしていこうとしており、たとえ短時間であっても、マサヒコの入浴介助を自分の役割とするなどして、子どもとの接触に心掛けているようである。母親の大変さを、その傍らでもっとも良く理解しているのが、この父親のようであり、仕事で忙しい中、家事、育児にわたっても、役割分担しつつ、一家の行動を基本的なところで、方向付けていくという役割をになっているようである。第3子の出産も当然のこととして、心すなおにうけとめられている。

ヨシフミの父親の場合

子どもが障害児だとわかった時にも、“子どもはあくまでも神様からの授かりのものであり”この家ならば、この子も幸せになれると神が考えて生まれてきた子どもであるとして、きわめて深い受容性を発揮している。生後間もなくから、ヨシフミのけいれん発作の頻発や、脳の手術などで、母子の入院生活が長びき、母親が疲れた表情で居る時には、工夫をこらした手作りの家具で、その心をなぐさめることに努め、料理も、買い物も、一切を父親が引き受けて、誠意を尽くしている。

ヨシフミの発達のために、少しの可能性でもあるならば、それに賭けようと考えている父親は、療育グループへの参加についても、“少しでも可能性があるならば、任せますから、みなさんの思うようにやって下さい”との

姿勢を、初期から明らかにして、協力的に動いている。合宿への参加も、それに続くさまざまな父親参加の機会にも、積極的で、自分に出来ることなら何でも協力するという揺るぎない姿勢は一貫している。合宿では、他の両親と会って話をすることを楽しみに参加し、夜の更けるまで議論できたことを喜び、療育スタッフの“子どもに向ける熱意と情熱に、心をうたれた”として、より一層、その後の交流に熱心になっている。そして、1年の終わりには、“私にとって、グループの人たちに、色々教えられたことは、他に類をみないほど大きな意義をもつもの”であると述べ、家の中がいよいよ明るくなった点を指摘している。“今のままで、幸福そのもの”という父親は、外出することも大変な母と子を、守って、あいかかわらず、料理から買い物までのかなりの部分を引きうけて、文字通り、ヨシフミを中心にした家庭作りを行なっている。

タカヒロの父親の場合

出生直後、母親より先に医師から、子どもの障害を聞かされ、かなり気持ちが揺れ動いたようである。“たしかに神をうらんだのも事実ですし、絶望的な心境にもおちいりました。しかし、出産直後の妻にどのように説明したら良いかを考え、また、タカヒロが、小さなベッドで、私からの輸血を受け、精いっぱい生きようと努力している姿を見て、骨肉を分けた私の分身であるこの子が、早く元気になるように願わずにはおれませんでした。とりあえず生命だけは助けて欲しいと、神に祈りました”と、その時の複雑な心境を述懐している。

どちらかという気持ちの整理のつかないままに、療育グループへの参加を、母親から伝えられ、始めのうちは、“どこも行かないよりは良いだろう位の気持ち”で、そのことをうけとめている。このグループに参加するようになって1年目の夏合宿の時は、母親が妊娠中の体であったため、父親のみが、母親に求められて、タカヒロと弟を連れて参加してきた。仕事の都合で、夜には帰ったために十分な話はきけなかった。2年目の夏合宿は、母親も、3人の子どもの世話にふりまわされ疲労気味で体調を崩し、父親も仕事の調整がつかず、参加できなかった。しかし、基本的には子どもの変化、母親の安定、家庭のまとまりへの影響などを感じ、母親が疲れ気味になっていることを気にしながらも、療育グループそのものに対しては、肯定的で、夏の家庭訪問、クリスマス会、終了の会には、積極的に参加している。日常生活面で、手伝う余裕を持たない父親は、こうした行事活動の折などに、せめてもの罪ほろぼしをしているようにも受けとめられる。また、このグループに対しては、“一種の仲間

意識”を持てるため、安心できることも述べている。母子が療育グループに通うことについては、良いことだと思いつつも、母親の身体的負担を考えて、無条件に喜ぶことも出来ないという、若干の両価感情をもっている父親と見てよいように思われる。

現在は、タカヒロの存在を、“私にとってかけがえのないもの、生命のたくましさを教えてくれるものであると共に、生きていく上での試練でもあり、また、妻と私が、協力しあって家庭を営んでゆく源泉であることも事実です。ゆえに、タカヒロは、『私の長男である』とさまざまな思いをこめて、言いたいのです”という形で、うけとめている。そして、そうした強い思いを抱えているが故に、“部外者の興味本位の目”や、“単にお金を増やせば済むという考えの福祉行政”に、腹立ちを覚え、“私にとって、1番不安なのは、生身の体である私に、万一の事があった時のことです。その時には、死んでも死に切れない思いでいます”と、やり場のない気持ちを吐露せざるを得ないでいる。また、家庭内の自分の役割としては、母親の負担軽減と、気持ちの通じあいのための努力を志向しながらも、母親に対して、仕事の疲れを癒すような家庭作りを、どこかで求めており、3人の子の育児に疲れ切ってしまう現在の母親との間では、ほんのわずかとはいえ、要求のくいちがいが生じているように見受けられる。

2 母親のうけとめた父親の意識の変容過程

表5には、父親に質問紙を依頼した時、同時に依頼した母親への質問紙の回答を整理して示した。これまで見てきたいくつかの点に関して、父親の認識と母親の認識との対応や、また父親の意識変容を母親がどのように受けとめて、家族力動の変化に結びついていったのかを、検討するための素材となるべきものである。先の質問紙と同じく、a) 障害児とわかった時点、b) 療育グループへの参加をめぐって、c) 現在の心境の3つの時点に分けて整理している。

ノブコの母親の場合

我が子が障害児であると知らされることは、大きなショックではあったものの、父親もやはり同じようにショックであったろうと受けとめており、母親のショックの方が大きかったであろうと考える父親の認識とは、若干のくいちがいが見られる。そのことは、たがいに、相手を気づかう気持ちの反映として理解され、この時点においてすでに、ノブコを軸として、両親間の関係が、より強い連帯へと動いていく志向性を見てとることができる。療育グループへの参加は、母親が主導権をとって決め

ているが、夏合宿をきっかけとして、父親自身をも、ノブコの療育に巻き込んでいく動きを強めている。父親自身の療育グループへの参加は、父親のノブコの問題に対する関心と理解を深め、またノブコのことを共に考える機会とそれだけの基盤を与えられたことにより、家族がより確固としたまとまりを作りはじめたことを、実感している。それほど積極的で熱心であるとはいえないまでも、療育グループにも、求められればイヤがらずに参加し、連絡ノートにも母親が記載を求めれば、1週間位メモと鉛筆を持ち歩いて苦吟する父親の姿に接し、その誠意を確認できて喜ぶ母親である。

現在、こうした父親のうけとめに対して、母親から望むことは、“とにかく家族のためにも、健康とケガには十分気を付けて欲しい”というだけで、あとは満足できる父親であるという。こわくて考えられなかったという第

3子出産の決意を固めたのも、こうした両親間の関係の変化にもとづいて、家庭内におけるノブコの存在意味と、両親の人生に対する構えが、微妙に変わってきたことの具体的なあらわれとして理解されよう。

マキコの母親の場合

マキコが障害児であることを医師に知らされた時は、“頭の中がカラッポに”なってしまい、そのことが夢であればよいと願うほどのショックで、ただ茫然とするばかりであったというが、ノブコの母親同様、やはり父親も同じ程度のショックを受けたものと見ている。マキコが生まれて3年間は、母親自身も仕事を持っていたため、近所に住む母方祖母に、昼間の養育をまかせていた母親であったが、マキコが3才になったのを機に、退職し、マキコの養育に専念しようと決意した折、療育参加で

表5 母親がみた父親

a) 療育グループに参加するまで

質問項目	ノブコの母親	マキコの母親	マサヒコの母親	ヨシフミの母親	タカヒロの母親
子どもの障害がわかった時	生まれて1年以内に子どもの様子で夫婦が同じぐらいに知った。	生まれた直後に子どもの様子で母親が先に知った。	生まれた直後に子どもの様子を医者から聞いて夫婦同じぐらいに知った。	生まれて1年以内に子どもの様子から母親が先に知った。	生まれた直後に夫から知らされた。
母親の気持ち	目の前が暗くなるほどのショック。	どう理解してよいか、わからずピンとこなかった。	目の前が暗くなるほどのショック。	自分達の子には違いないので、障害の有無は関係ないと思った。	目の前が暗くなるほどのショック。どう理解してよいかわからず、ピンとこなかった。
夫婦の気持ちの違い	二人とも同じような気持ちだった。	夫の方が多少深刻にうけとめていた。	夫より自分のショックの方が、はるかに大きかった。	夫のおかげで、それほどショックはなかった。	夫の方が多少深刻にうけとめていた。
夫の配慮	一緒にこれからのことを話し合った。さり気なく、心の支えとなってくれた。	慰め、励ましてくれた。しっかりするように叱って、自覚を促してくれた。	慰め、励ましてくれた。さり気なく心の支えとなってくれた。	さり気なく、心の支えとなってくれた。	慰め、励ましてくれた。
夫の子どもへの態度の変化	少しも変わらず、愛情深い。		より一層、可愛がるようになった。	少しも変わらず、愛情深い。	
母親自身の気持ちの変化	可愛いことは、少しも変わらない。不憫で、愛しさが増した。複雑で、言い表し難い気持ちの変化があった。	複雑で、言い表し難い変化があった。	最初の頃は重荷に思えることもあったが、だんだん愛しが増してきた。	より一層大事な子だと思えた。	子どもが可愛いことは、少しも変わらないが、複雑で、言い表し難い気持ちの変化があった。

b) 療育グループへの参加について

質問項目	ノブコの母親	マキコの母親	マサヒコの母親	ヨシフミの母親	タカヒロの母親
グループ参加の決めかた	妻の独断で。		二人とも、積極的に考えて。		妻の独断で。
現在の夫の協力度	頼めば協力してくれる。		関心が高く、協力してくれる。	自分より積極的で、何かと手助けしてくれる。	頼めば協力してくれる。関心は高い。
夫への影響	子どもに対する関心が高まった。妻子に対する理解が深まった。	妻の安定が有難いはず。	子どもに対する関心が高まった。	子どもに対する関心が高まった。どことなく安心した。	どことなく安心した。あなた任せになった。
行事参加の受止め	熱心ではないが、得るものがある様子。	積極的ではない。本心はわからない。	楽しみにして、もっと出席したがっている。		積極的でも、イヤがってもない。
夫の参加の必要性	家族のまとまりのため。		夫への刺激、自覚を促すため。	家族のまとまりのため。	

c) 現在の心境

質問項目	ノブコの母親	マキコの母親	マサヒコの母親	ヨシフミの母親	タカヒロの母親
子どもの存在の意味	苦しみの種のひとつ。心の安らぎ。試練。家庭の中心。	喜びの源泉。宝物。家庭の中心。	宝物。試練。家庭の中心。	喜びの源泉。宝物。心の安らぎ。	悩みの種。宝物。普通の子と同じ。
子どもの貢献	家族の人的成長。社会参加。 家族のまとまりがよくなった。			社会参加。この子の居ること自体が幸せ。	家族の人的成長。社会参加。友人ができる。
夫の配慮	育児・家事を分担してくれる。				手伝いはするが、逆に、夫への配慮をもとめる
さらに、配慮してほしい事	できるだけ家にいて、相談相手になってほしい。	十分満足している。	無駄使いをしない。	十分満足している。	育児・家事の分担。

あった。当初は、祖母への依存心から抜け切らず、療育グループへも、祖母同伴で通っていた母親であったが、母親自身の療育グループへの信頼感が増し、夏合宿への参加も、マキコを連れての初めての外出ということで、決意するまでにさまざまに思い悩んだものの、最終的に決意して、父親と子ども参加したのである。そして、そのことをきっかけとして、みずからの責任でマキコを養育しようとする方向で動き始めている。夏休み明けから

は、祖母を同伴せずに、ひとりマキコを車に乗せて、来所するようになった。

父親は無口で多くを語らないため、母親も、どの程度積極的に、マキコのこと、療育グループのこと、そして母親自身のことを、考えているのか、その本心をつかみかねるということを述べている。そして、その“本心”を確認するという意味を含めてであろうが、母親は、父親のグループへの参加を、“是非必要”なことと、位置づけ

ている。母親自身が、喜んで参加し、精神安定の源と述べている療育グループへの参加に、父親が協力し、みずからも参加するという具体的な行動を示すことは、マキコの母親にとっては、父親に対する信頼感を高める貴重なタイミングであったように思えるのである。マキコの存在を通して得られた、この両親間のつながりの確認は、「私の母が、こういう子は『福子』だから大切にしよう申しましたが、ほんとうにそうだと思います」との認識へとつながり、マキコの存在を肯定的にうけとめていく方向を作っているものと考えられよう。

マサヒコの母親の場合

子どもの障害を知らされたことは、「その時は、ただ自分がかわいそうで毎日泣いてばかりいました。本当は、それではマサヒコの方がずっとかわいそうなのですけど」と、その心境を幾分自省をこめて、述べるように、きわめてショックなことであった。しかし、泣いてばかりいる母親にかわるように、父親は、始めからマサヒコの存在を受容し、みずからの人間的成長の糧とすべく積極的にうけとめ、また当時母親が帰省していた実家の祖母も、マサヒコの障害をあるがままに受け入れており、そうしたまわりの姿勢に支えられてか、母親も立ち直ってくる。「マサヒコに対する私の気持ちも、だんだん変化してきたように思います。最初の頃は重荷に思えることもありました、だんだん愛しさが増してきました」として、マサヒコの立場に立っての発想が自然に出来るような、心のゆとりを回復している。

療育グループに参加することについても、むしろ父親の方が積極的にリードしていたとの印象を持たれるほどに、父親の配慮がなされており、母子の療育参加に援助的である。母親自身も、第3子妊娠中の身体でありながら、父親や、遠路手助けに来てくれる母方祖母の協力によって、熱心に通所し続けてきた。11月になってから、第3子の出産のため療育グループは休んでいるが、その間にも、しばしば連絡をとるなどして、心からグループのつながりを喜んでいるようであった。父親自身が、この療育グループを通じて、マサヒコとのかかわりを考え直そうとする熱意を示しているため、その事を身近で実感している母親は、家族にとってのマサヒコの存在する肯定的な意味を、確認できてきている。この療育グループが、そうした家族力動に影響を及ぼしてきた様子は、質問紙への回答の中で、母親が父親の過労を気づかいつつも、「やさしさを忘れないで下さい」と注文つけるのに対し、父親の側からも「いつもニコニコはしてられない」と反論しながら、「昔と違って機嫌のなおるのが早くなったのは良いことだ」と母親の変化を評価していると

いうやりとりの中にも読みとることができる。母親にとってのグループでの体験は、「マサヒコと私が、社会に出るのを、背中からそっと押して下さったように思います」と述べるような性質のものであった。両親が相互の深いつながりを確認できたことは、おそらく、こうした母親の社会参加への勇気を導き出す原動力ともなったのであろう。昭和58年度からは、転居先の近隣の障害児通園施設へと通いはじめている。

ヨシフミの母親の場合

我が子の障害は、始めからそれほどのショックではなかったと語られている。子どもの障害に気付いた時、「主人に、神様が私たち夫婦ならば、この子を生命ある限り守ってくれると、我が家にお授けになったのだと言われ、私もそう信じ、今でも信じ続けています。主人のおかげで、その時のショックは、それほどありませんでした」として、父親の確固たる障害受容の姿勢と信念が、強力に母親の心を支えていたことを述べている。

療育グループへ通うことについても、むしろ、母親よりも父親の方が積極的であったというが、母親の気晴らしと、子どもの発達のためにと配慮する父親の心を受けて、母親自身も熱心である。「この子を中心に我が家はすべてが動いています」と言いきって、自身もそのように行動している父親の姿勢は、まさに母親の人生指針ともいえる。おたがいに感謝の気持ちをもって、両親の結びつきには、確固たるものがある。療育グループの存在は、そのことを、むしろ確認しあうためにあるのではないかと思えるのである。

タカヒロの母親の場合

出生後間もなく父親を通じて聞かされた、我が子に障害が残るかも知れないという話は、それ程深刻な実感の湧かないものであったようである。父親の方は、母親のショックに気を使っているが、母親自身はむしろ父親のうけとめ方が自分より深刻であることを感じている。おそらくは、タカヒロの障害に対する認識は、母親の中で徐々に深められてきたものなのであろう。それでもやはり、父親が、自分の本分は外で仕事をするにありと、基本的なところで認識していることに対応して、母親の側でも、家事、育児は自分の役割であるとして、タカヒロの日常的な養育も、ひとりでその肩になおうと努めてきたようである。療育グループへの参加も、そうした流れから、母親の判断でなされている。

療育グループに通いはじめて、およそ半年して第3子が生まれ、第1子であるタカヒロの世話と、母親に対し分離不安と反抗を示す2才の第2子と、3人の子どもの

育児に、奮闘せざるを得ない事態が出来ていく。特にグループに通う日は、朝の準備などで大いそがしの母親であるが、父親はそうした大変な状態に対する認識は、あまり出来ておらず、母親もまたそれを、とりたてて伝えようともしていない。たしかに父親自身、母親が3人の子の育児で疲れていることの認識は十分にあり、母親の手助けを、できる限りの範囲で心掛けてはいるが、基本のところはやはり、自分が仕事に専念できるような配慮を母親に求めているものと理解できる。母親の中では、それまで、それがごく普通の夫婦関係であり、その要求に応えようと努めてきたものとも言える。しかし、この療育グループに通い、その中で、子ども本位に仕事の都合もつけて、常識的な“母親の仕事”までも手助けし、肩代わりするというグループ内の他の父親の話をしきにつれ、従来の夫婦の役割について、疑問を抱き、再考の余地を感じ始めたところであるようにうけとめることができる。そうした母親の内なる変動を、父親がどのように気づき、どのように応えていくのかは、このタカヒロの両親のこれからの課題でもあるが、もっと広く、社会常識的な父親役割、母親役割の枠を破って、自分たちの家庭に適合するパートナーシップのあり方を探ることが、何よりも要請されることとなろう。

V まとめと考察

1 父親のグループ参加の意義

5人の子どもとその母親が、私どもの療育グループに通うことに対し、当初は、懐疑的であった父親も、始めから積極的であった父親もいたが、1年の経過の中で、母と子の変化に触発されて、直接参加へと動機づけられ、さらに、そうした参加体験を通して、父親自身の意識変容が生じ、その変化を母親が受けとめて、家族力動そのものが動いていくという過程をみてとることができた。父親がグループに参加することの意義は、こうした変容を促すきっかけを作ることにあるともいえるが、それは、およそ以下の3点に整理することができる。

その第1は、療育グループのメンバー間の話しあいを賦活することにある。日常の療育活動の一環として、母親グループの話しあいの場を作っているが、その話しあいの場の中に父親が参加するには、相互に異和感が強く実現し難い。したがって、父親もごく自然な形で参加し得るような形を作ることが、必要となる。そのようにして構成される話しあいの場は、日頃とかなり異なった雰囲気の間となり、さらに、さまざまな父親の考えを聞けることは、また新たな発想に触れることになって、母親達に大きな刺激ともなっていく。今回のグループにおい

ても、夏合宿の折、ヨシフミの父親が口火を切って、“この子に万にひとつの可能性があれば、自分はそれに賭けて悔いはない。それで、子どもの生命が尽きたとしたら、それはその子の寿命であり天命としてうけとめるべきものである”という主旨の発言をすると、それを受けて、マサヒコの父親が、“自分は、この子を何としても生かしてやろうと思っている”と述べ、マキコの父親は、“わが家は自然流”と語り、日頃の母親グループの中では話されないような側面での話しあいが、白熱していった。そこに参加していた母親からのその場での発言はなかったが、後にその議論をふまえて、日頃考えもしなかったような“子どもの死”が、たとえ話とはいえ話題にのぼったことにショックを受けながらも、さまざまに考えさせられたとする母親の意見が、いくつか述べられていた。また母親相互にとっては、そこでおたがいの家族構成もわかり、父親の考え方や人柄に触れる経験を持つことによって、相互理解がすすみ、その後の話しあいの場でも、発言の主旨とその背景を、よりの確に理解しあえるようになっていったように思われる。

第2には、父親同士の話しあい、また相互の直接の接触を通して、自己の人生観や家庭内での役割を考え直すきっかけとなり得るということがある。“あそこの父親は、良くやっている”という認識は、母親の方が敏感であり、父親の方は、“よそはよそ、うちのうち”とする発想が、どちらかといえば強いようであるが、少なくとも話しあいの場の中に入れば、日頃特に意識することなくふるまっている、家庭内での自分の行動原理のようなものを、何らかの形で、それらしく言語化せねばならず、むしろ、そうした自己内での意識化、明確化の過程に意味を見出すことができたようである。

第3には、父親と母親の双方に、同時的かつ相互賦活的に生ずる相手の見直しと、新しい側面の発見が生じ、それをきっかけとして、夫婦関係の再構成が展開するということである。自分の考えを他者に伝えたり、新しい体験をしたりすることは、それ自体が自己の内界の整理であり、自己の新発見の過程であるという側面をもつ。父親は、療育グループの行事の折に生き生きと楽しそうに活動する母親の姿を見て、母親を新発見し、一方、母親の側でも、母親の前ではそれほど明確には語らない重い障害児を抱えての人生観や生活展望や家族観などを、他の父親たちと語りあう父親の姿とその発言内容に触れて、今まで知らなかった新しい側面に出会ったとの思いを抱くことも多く見られた。それは、今回のような療育グループに好意的、協力的な雰囲気の中で行なわれる場合、相互に肯定的な受けとめを作ることにつながる。それは、家族力動全体に影響を及ぼし、重い障害を持った

この子を中心として、家族がまとまり、より調和的で生産的な役割分担の体制を確立していくことにつながっていくものと思われる。

2 父親への働きかけのステップ

そのような展開を刺激する上で、療育グループが介在する役割の意味は大きい。家族が子どもを中心として十分調和を保ち、安定している場合であっても、それは新たな展開のために両親を勇気付けるという意味において、十分の意味を持つ。しかしながら、今回の報告にある5例の父親は、幾多の重度障害児を持つ父親の例の中でも、きわめて理解ある、養育に協力的な姿勢を、もともと持っているような、かなり少数例に属するケースであるといえる。私どもがこれまで接してきた障害児の父親の中には、私どもの療育の視点がそういう側面にまで及んでいなかったといううらみはあるが、療育期間中、1度もその姿を見せなかった例も少なくない。家族訪問の折にも、父親はひとり喫茶店へ出かけて行ったりする例もないわけではないが、そのことで、むしろ私どもの側も、内心ホッとしたような状況もあり、単に父親の問題として片づけられないものを含んでいると考えるべきであろう。

しかし、それでもなお、この5人の父親たちは、いわゆる核家族化されたニューファミリー、ニューサーティと呼ぶにふさわしい世代の都市型の家族における父親像であることとらえることもできる。それだけに、自分たちが、“子どものことで”療育に参加することに、それほど大きな抵抗を示したりしなかったことは、幸いであった。多くの場合は、まず療育グループとの接触の機会を見つけることに苦労しなければならず、仮に接触できたとしても、療育活動の一端に参加してもらうことはまた一層の抵抗に出会うことになる。そうした点も考慮に入れた上で、私どもは、父親へのアプローチのステップを、一応次のように想定したいと考える。

(1) 母親と子どもの成長・発達を支援することを通して、家族が子どもを中心にしてまとまり始めるきっかけを見出す時期を待つことが、第一のステップである。

父親が療育グループに参加する気持ちを持つためには、それなりの必然性と、自然な流れがあるといえる。まず家庭内でも、ある程度、自分が子どもの養育に参画しようとしている構えがない以上、自発的なグループ参加は期待し得ない。先の論文（後藤・村上ら 1982・b）で報告した2人の母親の自立の過程においても、父親が家庭内で、子どもとのかかわりの姿勢を見せ始めたことが、家族のまとまりの展開のきっかけとなっていた。それまで、父親は、子どもの介護は母親にまかせきりで、関心

を示さず、母親の側で、“あの人は当てにならない”として、むしろあきらめられていった存在であった。そのケースの場合、むしろ母親の気持ちの中で、父親を当てにして、自分ひとりの肩に子どもの障害の重味を背負わせて平然としているかに見える父親へのさまざまな感情を、ふっきって、自分がひとりで背負おうと決意できたことが、かえって夫婦関係を安心できるものに変え、父親の自覚と協力の気持ちを少しずつでも触発していったものと考えられる。そうした夫婦関係を軸とした家族力動に理解の目を向け、その変容過程をおさえておくことは、初期において、働きかけのタイミングをつかむ上で重要である。

(2) 第2のステップは、療育グループに対する認識を深めてもらうような働きかけを行なうことである。

母子が、安心して、喜んで通えるグループであることが、間接的に父親にも伝わり、また、子どもの発達と母親の精神安定と成長を、より確かなものにするためには、父親を含めた家族全体の協力が必要であると考えられる立場を伝え、そうした点への理解を求めていくことが、必要な時期がある。家庭内で、子どもの問題を母親まかせにしないで、自分も療育に関与しようとしている父親であれば、自分も療育援助活動の一環に組みこまれていると伝えられることは、“なるほど、そんなものか”という程度であっても、その必要性の認識に、それほど強い抵抗は示されないようである。

(3) 父親の参加し易い状況を作り、実際に療育活動の一端に触れて、直接体験的に活動内容をうけとめてもらえるような場を準備することは、きわめて重要な点である。

今回も、父親が参加して、私どもの療育活動の一端に直接触れたのは、夏の海水浴の折であった。母親にとっても、子どもにとっても、多くの場合、初めての体験となり、かなりのためらいを経た後に参加を決意することになるが、不安と同時に期待し、楽しみとうけとめた面も少なくない。思い迷いつつ、思い切って参加を決意し、案ずるより産むが易しで、何ほどのこともなく、母子とともに楽しみ、自分もその一翼を担って一役買ったことで、父親自身も満足感を得て、そうした家族での外泊に自信をつけることにもつながる。こういう体験の積み重ねが、母親の気持ちを解放し、子どもの生活を生き生きさせるのかという気付きの場ともなる。そのことは、家族に対して、父親が、はたさねばならぬ役割のひとつを、具体的な形で父親に気づかせ、その自覚を促すことにつながっていく。

(4) 父親に療育活動の運営や企画の一部にも参画する機会を作り、また療育活動についての意見や感想を求めるなどして、主体的な参加の意識を高めることは、グルー

プへの参加意欲を持続させ、高める上で有効である。

夏合宿以後、質問紙により、父親の意見を求め、家庭訪問においても、父親の話に耳を傾け、夏合宿での父親の体験の整理をはかり、今後への動機づけを高めてもらうことを願った。さらに、その後のクリスマス会、終了の会には、父親も含めた全員に、協力を要請して準備を行ない、父親の出番を多くし、自然な形で父親のより積極的な参加を触発するように配慮してきた。

(5) 他の障害児の家庭と触れ合い、相互啓発される体験を尊重し、そうした機会を作ることは、最終的に重要なステップである。

普通、父親同士の相互交流は、母親同士が気軽に交流を深めるのに比べ、ほとんど自発的には起こってこない。そうした場を準備したとしても、ある程度腰を落ち着けて、雰囲気盛り上げる配慮をしないと、ホンネを出しあつての議論にまでは展開し得ないことが多い。子どもの経験においても、一泊の合宿において、アルコールを入れて初めて、腹を割った議論が出来たのみで、後の機会には、形式的な挨拶と、リクレーションの域を出なかったうらみがある。それはそれなりに意味あることではあるが、体験の深まりを期待する点では今ひとつ物足りなさが残る。今後さらに検討すべき課題として残される所である。

毎度のことながら、私どもに生きる意味の深さと広さを教えてくれる子どもたち、そしてその御両親には、今回、御協力いただいた5家族にとどまらず、心からなる敬意と感謝の念を表すものである。

文 献

- Dorman, G. 1974 *What to do about your brain-injured child*. (幼児開発協会訳 1974 親こそ最良の医師——ドーマン博士はいかにして脳障害児を治療したか! —— サイマル出版会)
 Finnie, N.R. 1974 *Handling the young cerebral palsied*

- child at home*. 2'nd edition. William Heinemann Medical Books Ltd, London. (梶浦一郎監訳 1976 脳性まひ児の家庭療育・第2版 医歯薬出版)
 後藤秀爾・村上英治・讓 西賢・藤本章子・柳沢好子・高木昌子・服部孝子・北村由紀子・田垣裕美 1980・b 重度重複障害幼児の集団療育(2)——グループ参加をとおしての母親の動き——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 27, 125—134.
 後藤秀爾・村上英治・讓 西賢・深谷昌子・水野博文・柳沢好子・松原道世・小杉和江 1981 発達障害幼児の集団療育(その4)——10年の歩みをふりかえつての調査から——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 28, 209—226.
 後藤秀爾・鈴木靖恵・佐藤昌子・村上英治・水野博文・小島好子 1982・a 重度重複障害幼児の集団療育(3)——健全児きょうだいの発達課題——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 29, 205—214.
 後藤秀爾・村上英治・鈴木靖恵・小島好子・水野博文 1982・b 重度重複障害幼児の集団療育(4)——2人の母親の3年間の歩み——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 29, 215—224.
 向野幾世 1978 お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい サンケイ出版。
 村上英治・後藤秀爾共編 1982 障害重い子どもたち——集団療育の場で—— 福村出版。
 Nason, M. & Nason, D. 1974 *TARA: The dramatic story of a brain-injured child courageous fight to get well*. Hawthorn Books Inc., New York. (石井清子訳 1975 タラ——小さな生命の詩—— 三笠書房)
 西村章次 1979 実践と発達の診断——障害児の発達と育児・保育・教育実践—— ぶどう社。
 讓 西賢・村上英治・後藤秀爾・藤本章子・柳沢好子・高木昌子・服部孝子・北村由紀子・田垣裕美 1980・a 重度重複障害幼児の集団療育(1)——子どもとのかかわりをとおしての療育者の動き——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 27, 115—124.
 (1983年7月31日 受稿)

<付表1>

昭和57年度M・R・グループ夏合宿に関する質問紙調査

先日は、海水浴、お疲れさまでした。全組、御両親そろっての参加、私どもにも大変嬉しいことでした。

とりわけ夜の議論は、私どもの勉強になりましたが、まだ、十分に御意見をきけぬままに終わった部分もあったように思います。それで、今回の合宿の反省と総括をかねて、前回いい足りなかつた分についても、おうかがいしたいと思うものです。

お手数ですが、以下の質問に対し、卒直な御意見をおきかせ下さい。今後の活動の参考にさせていただきたいと思ひます。

このグループの活動は、できるだけ、お父さん、お母さんと一緒になって、作っていきたく思っているものですから、遠慮のない意見を、どうぞお寄せ下さい。

○父親用

1) お父さんが、今度の合宿に参加なさるお気持ちになつたのは、どういふ理由が一番大きかつたのでしょうか。

[]

2) お父さんにとっての今度の合宿の一番大きなねらいは、どういふ点にあつたのでしょうか。また、そのねらいは、達成されたのでしょうか。

[]

3) 合宿中、印象に残つたエピソードに、どんなことがあつましたか。

[]

4) 子どもにとって、一番意味のあつたと思われる活動は、具体的にどういふ活動だつたと思ひますか。

[]

5) 今回の合宿で、どのような点に意義を感じられましたか。

a) 子どもにとって

[]

b) お母さんにとって

[]

c) お父さん自身にとって

[]

d) その他の人達にとって

[]

6) 今回の合宿で、こういう点をこうしたらよと思はれるような点に思ひあたりましたら、御指摘下さい。

[]

7) その他、何でも、いい残したことをお書き下さい。

[]

○母親用

1) 今回の合宿に参加するにあつて、一番気を使はれたのは、どういふ点に關してですか。

[]

2) 合宿療育ということに、どういふ期待を持って参加されたのでしょうか。また、その期待は、満たされたのでしょうか。

[]

(3) 以下、父親用と同一)

〈付表2〉

昭和57年度療育終了時における質問紙調査

○父親用

子どもたちに教えられることばかりの私どもですが、これまでも、どうすればより良い療育ができるのか、私どもなりに考え続けてきました。

そんな私どもの、最近のテーマは、この療育が、全体としての家族に、どういった影響を及ぼしているか、またそこに、どういった接近をすべきかということになってきました。

そこで、日頃は療育に顔を出されないお父さん方の御意見・御感想をうかがって、今後の活動の指針としたいと思い、お願いするものです。

社交辞令を抜きにして、卒直なお考えを、お聴かせ願えれば、嬉しく思います。

これまでも、時折は、お話をうかがうことがあったのですが、そのまとめと再確認の意味もこめて、お答え下さい。

〈A〉 () ちゃんが生まれた頃からのことを、思い出しながら答えて下さい。

- 1) この子に障害があると、お父さんに判ったのは、いつのことでしたか。(どれか1つに○をうって下さい。)
 - イ. 生まれる前に判っていた
 - ロ. 生まれた直後
 - ハ. 生まれて1年以内
 - ニ. それ以後
- 2) どういう形で知らされましたか。
 - イ. 子どもの様子で判った
 - ロ. 医者からきいた
 - ハ. 妻から知らされた
 - ニ. まわりの雰囲気で何となく判った
 - ホ. その他 ()

※その他の場合は、自分で書いて下さい。
- 3) それを知ったのは、お父さんとお母さん、どちらが先でしたか。
 - イ. 妻が先に知った
 - ロ. 自分が先に知った
 - ハ. 両方同じ位に知った
 - ニ. その他 ()

- 4) 子どもに障害があると判った時の心境は、どのようなものだったでしょうか。

- イ. 目の前が暗くなる程のショック
- ロ. 困ったなと思って、先のことを色々考えた
- ハ. どう理解してよいか判らず、ピンとこなかった
- ニ. なんとかなるサと思い、気にならなかった
- ホ. 自分達の子には違いないので、障害の有無は関係ないと思った
- ヘ. 自分達に障害児が与えられてよかったと思った
- ト. その他 ()

- 5) その時の心境を、御自分の言葉で、改めて、下のスペースに書いて下さい。

- 6) この子が障害児だと判った時の気持ちは、お父さんとお母さんとでは、どのように違っていたと思われますか。

- イ. 妻のショックの方が、はるかに大きく深刻だった
- ロ. 妻のショックの方が多少深刻だった
- ハ. 2人ともほぼ同じような気持ちだったと思う
- ニ. 妻より、自分のショックの方が大きかったと思う
- ホ. 妻の気持ちまでは判らなかった
- ヘ. その他 ()

- 7) そんな時、夫として、妻に対して、どのような心づかいを、なさいましたか。(あてはまるものを、いくつでも選んで下さい。)

- イ. 一緒に、これからのことを話し合った
- ロ. 妻をなぐさめ、励ますことに、心をくだいた
- ハ. しっかりするように叱って、自覚を促した
- ニ. 黙って見守ることにした
- ホ. さり気なく、心の支えとなるよう考えた
- ヘ. 妻のことまで気がまわらなかった
- ト. どうして良いか判らないので、何も考えなかった
- チ. その他 ()

8) 障害児と判る前までは、この子に対して、どんな気持ちを持ってみえましたか。（あてはまるものを1つ）

- イ. 待望の子どもなので、とにかく、生まれて嬉しかった
- ロ. 元気に育つかどうか、期待半分、不安半分
- ハ. それなりに育つだろうと楽観的だった
- ニ. どういう子に育てようかと、考えて楽しんでいた
- ホ. どうやって育てるか、頭を悩ませていた
- ヘ. 特に、これといって何も感じていなかった
- ト. その他（ ）

9) この子に対する気持ちは、障害のあることが判ってどのように変わりましたか。

- イ. 基本的には、違ってない
- ロ. 将来への希望が消え、不安が増した
- ハ. この子に対する思い入れが、薄くなった
- ニ. この子が不憫に思え、愛しさが増した
- ホ. 人生の重荷に感じ、憎らしいとさえ思った
- ヘ. 複雑で、言い表わし難い気持ちの変化があった
- ト. この子が、より一層大事な子だと思えた
- チ. その他（ ）

 私どもの療育に、お子さんとお母さんが、参加するようになってから、お父さん自身と、家庭全体が、どのように変わってきたと見ておられるかということに関して、御自分の考えを、お答え下さい。

10) 私どものグループに、お子さんが参加するにあたって、お父さんは、どのような形で、お母さんから相談を受けましたか。

- イ. 妻が迷っているということで、判断を求められた
- ロ. 妻は参加を決意していたが、一応了解を求められた
- ハ. 参加することについて、妻の不安があり、援助を求められた
- ニ. 参加はじめてから、事後承諾の形だった
- ホ. 2人で、よく話し合って結論を出した
- ヘ. その他（ ）

11) お父さん自身は、母子が、私どものグループに毎週通うことについて、はじめのうちは、どのように受け止めてみえましたか。

- イ. この子に何がしてもらえるのか、疑問に思っていた
- ロ. 何もしないよりは、何かした方が良さだろう

という位の積りで見ていた

ハ. 少しでも、この子の発達につながることを期待した

ニ. あまり賛成できることではないと、むしろ、止めさせようと思ったりしていた

ホ. 大変良いことなので、できるだけ協力しようと思った

ヘ. 何だかよく判らず、ほとんど関心がなかった

ト. その他（ ）

12) 現在では、母子が、私どものグループに通ってきたことについて、どのように受け止めてみえますか。

イ. 大変、良いことだったと思う

ロ. 行かないより、行った方が良かったという程度に思う

ハ. どちらでも良かった。妻の好きなようにしただけである

ニ. どっちかという、行かない方がよかった

ホ. 行くことで、不都合なことが多かった

ヘ. その他（ ）

13) 母子が、私どものグループに通ってきたことで、よかったと思うのは、どのような点についてですか。（いくつでも選んで下さい。）

イ. 子どもの発達が、見られた

ロ. 妻の精神安定、成長に、役立った

ハ. 自分にとって、間接的な刺激となった

ニ. 家庭が、まとまってきた

ホ. その他（思いつくことを、下のスペースに書いて下さい。）

[]

14) 反対に、母子が、グループに通ってきたことで、不都合な点は、どういうところだったでしょうか。（いくつでも選んで下さい。）

イ. 下手に子どもをいじられたような気がする

ロ. 妻の負担が増え、大変になった

ハ. 自分の存在や、意見を無視して、グループの方ばかり、気をとられていた

ニ. 今まで以上に、自分に対する要求、指示が増えてきた

ホ. 妻が強くなって困っている

ヘ. その他（思いつくことを、下のスペースに書いて下さい。）

[]

15) 母子が、グループに通うことは、お父さんにとって、どういう意味があったと思われますか。(いくつでも選んで下さい。)

- イ. 妻と子の知らない側面を、見つけることができた
- ロ. この子の父親としての自分の立場や責任を、再認識する機会となった
- ハ. 自分の人生観を、考え直す機会となった
- ニ. この子の問題を共有できる仲間ができたという安心と、喜びを感じられた
- ホ. 子どものことを、夫婦で話し合い、理解を深める機会が増えた
- ヘ. その他(何でも気付いたこと)

16) 私どものグループへ通ってきて、この子が、どのように変わってきたと、見ておられますか。

- イ. 大変、成長してきて、満足している
- ロ. 成長してきたが、今ひとつ物足りない感もある
- ハ. ほとんど変化なし
- ニ. どちらかというと、問題が、多くなってきている
- ホ. その他()

※イ・ロと答えた方、17) を答えて下さい。

17) どういう点が、この子の変わってきたところと、見ておられますか。(いくつでも)

- イ. 活発になってきた
- ロ. 表情がよくなった
- ハ. 感情が出て来た
- ニ. 体が、丈夫になった
- ホ. 日常のことで、やれることが増えてきた
- ヘ. よく判らないが、とにかく何か変わってきた
- ト. その他()

18) 私どものグループに通ってきて、お母さんが、変わってきたと思う点を、あげて下さい。(いくつでも)

- イ. たくましくなった(自立してきた)
- ロ. 口やかましくなった
- ハ. やさしくなった
- ニ. 依存的になった
- ホ. 子どもの世話が、上手になった
- ヘ. 大胆に子どもを扱うようになった
- ト. 明るくなった
- チ. 神経質になった
- リ. 精神的に安定した

ヌ. 情緒不安定になった

ル. 生き生きしてきた

ヲ. 疲れ気味になってきた

ワ. 積極的・行動的になった

カ. 引きこもりがちになった

ヨ. 夫を、ないがしろにするようになった

ツ. 夫を、大切にするようになった

ネ. その他(思いつくこと)

19) そうした変化は、お父さんにとって、

イ. 総じていえば、大変望ましい変化である

ロ. どちらかといえば、望ましい変化といってもよい

ハ. 良いのか悪いのか、判断に困る

ニ. どちらかという困る変化に近い

ホ. 総じていえば、迷惑な変化である

ヘ. ほとんど関係ないので、ちっとも構わない

ト. その他()

20) お父さん自身にとって、みずからグループに参加した体験(夏の合宿、クリスマス会、終業式など)

は、今から考えると、どういう意味があったと思われますか。(いくつでも選んで下さい。)

イ. 日頃語れない子どもの問題を語り合えて、気持ちすが、整理された

ロ. 療育グループの雰囲気に触れて、グループに対する認識が、変わった

ハ. 同じ障害児の親同士、知り合えて、心強く感じた

ニ. この子が居ても、色んなことが、できるということを確認できた

ホ. 妻子の新しい一面を、発見できた

ヘ. 改めて、悲しい気持ちになってしまった

ト. 特にこれといって意味はなかった

チ. その他()

21) 同じ質問です。御自分の言葉で、改めて書いて下さい。

22) お父さんが、はじめて、そういった行事活動に、参加したのは、どういう気持ちからだったのでしょうか。(いくつでも)

イ. 療育グループが、どういう集まりなのかを、確かめるため

ロ. そうするのが、父親の務めと思ったから

ハ. 常識的に、ごあいさつ程度の気持ち

ニ. 自分達の家族のことを、もっと知ってもらおうと思って

ホ. 他のお母さん、お父さんと面識を持つため

ヘ. 妻が、参加を求めたから

ト. その他（思いつくままに、書いて下さい。）

[]

23) 療育グループが、家族全体に及ぼした影響や、もっと工夫すべき点に関して、考えてみえること、何でも構いませんので、書いて下さい。

[]

<C> お父さんが、現在、この子の存在をどのように受けとめ、家族の中で、どのような役割をとろうとしているかについて、考えていること、感じていることをお答え下さい。

24) 現在、この子の存在は、お父さんにとって、どのようなものですか。（いくつでも）

イ. 喜びの源泉である

ロ. 悩みの種である

ハ. 苦しみの原因のひとつである

ニ. 家中の宝物である

ホ. 心の安らぎである

ヘ. 神の与えた試練である

ト. 特に何でもない。普通の子と同じである

チ. 良くも悪くも、家庭の中心である

リ. その他（上の項目で、表わし切れないものをこのスペースに、書いて下さい。）

[]

25) 家族にとって、この子の居ることのプラス面には、どのようなものを、感じてみえますか。（あてはまるものを、いくつでも）

イ. 家族のまとまりが、よくなる

ロ. 家族みんなが、人間的に成長できる

ハ. この子が居なければ判らないような社会の一面に触れることができる

ニ. プラス面は、今のところ考えられない

ホ. この子の居ること自体が、幸せである

ヘ. その他（何でも思いつくままに）

[]

26) この子が居るが故に、お父さんが、日頃、家族（特に、お母さん）に対して、心掛けていることは、どういふことでしょうか。

イ. できるだけ、家に居る時間を多くとるようにしている

ロ. できるだけ、経済基盤をしっかりとさせるよう仕事に励む

ハ. 家族の気持ちが沈まないように、明るくふるまう

ニ. 話し合っ、気持ちの通じ合いを常に考える

ホ. 家族での娯楽・外出に、心掛ける

ヘ. 妻の手助けのため、家事・育児を、分担する

ト. 子どもへの接し方、訓練の仕方を妻に教えたり、常に、励まして育児にあたるようにさせている。

チ. 特に何も心掛けることはない。自然にしている

リ. 何かせねばならないことは判るが、特に何もしていない。家のことは、妻に任せている

ヌ. その他（何でも自由に）

[]

27) この子を含む家族の中で、父親は、どういう役割を、とるべきだと、お考えですか。

イ. 育児・家事についても、母親と分担しあっている

ロ. 育児・家事は、母親の仕事。父親は、母親が、それに専念できるように配慮する

ハ. 経済基盤が、何より必要だから、父親が十分働けるように、母親の方で、配慮する

ニ. 母親は、感情的になりやすいので、父親は、冷静に判断して、行動の仕方を、方向づけていく

ホ. 母親は、目先のことしか考えないので、将来のことまで、父親が、考えてやる

ヘ. すべて家の中のことは、母親に任せるのがよい

ト. 母親が、1番大変なので、何も言わず、グチの聞き役に徹し、さり気なく手助けをする

チ. その他（ ）

28) お父さんが、現在、家族に対して、考えたり、感じたりしている問題があれば、何でも自由に、書いて下さい。

[]

29) 私どものグループが、お父さん方に対して、今後、どういった働きかけをしたら良いか、あるいは、しない方がいいのかを、検討したいと思いますので、今年度のやり方についての御意見を、お寄せ下さい。

イ. あんな程度で、ちょうど良い。色々、役に立った

ロ. もう少し違うやり方を、工夫した方が良い面もあった

〔 具体的には— 〕

ハ. 父親とは関係なく、すすめて欲しい

ニ. 父親指導にもっと力を注ぐ方が良い

ホ. 判らない

ヘ. その他 ()

○ 母親用

今回お願いするこの質問紙調査は、お父さん(御主人)に関するものが、内容の中心になっています。子どもの問題をめぐって、あるいは私どもの療育グループの活動に関して、お父さんに感じていること、考えていることを、お書き下さると幸いです。

今後、“全体としての家族”へ働きかけるという方針ですすめようとしている今のやり方を、検討する素材としたいと思います。

よろしく御協力下さい。

日頃からお忙しいお父さんの御協力方にも、お力添え下さい。

<A> () ちゃんが生まれた頃からのことを、思い出しながら答えて下さい。

1) この子に障害があると、お母さんに判ったのは、いつのことでしたか。(どれか1つに○をうって下さい。)

イ. 生まれる前

ロ. 生まれた直後

ハ. 生まれて1年以内

ニ. それ以後

2) どういう形で、それを知らされましたか。

イ. 子どもの様子で判った

ロ. 医者からきいた

ハ. 夫(あるいは他の家族)から知らされた

ニ. まわりの雰囲気等で何となく判った

ホ. その他 ()

※その他の場合は、具体的に書いて下さい。

3) お父さんとお母さん、どちらが先に知りましたか。

イ. 自分(お母さん)が先

ロ. 夫が先

ハ. 両方同じ位

ニ. その他 ()

4) 子どもに障害があると判った時のお母さんの心境は、どのようなものだったでしょうか。

イ. 目の前が暗くなる程のショック

ロ. 困ったなと思って、先のことを色々考えた

ハ. どう理解してよいか判らず、ピンとこなかった

ニ. なんとかなるサと思い、気にならなかった

ホ. 自分達の子には違いないので、障害の有無は関係ないと思った

ヘ. 自分達に障害児が与えられてよかったと思っ

た

ト. その他 ()

5) その時の心境を、御自分の言葉で、改めて、下のスペースに書いて下さい。

〔 〕

6) この子が障害児だと判った時の気持ちは、お父さんとお母さんとは、どのように違っていたと思われ

ますか。

イ. 夫のショックの方が、はるかに大きく深刻だった

ロ. 夫の方が多少深刻にうけとめていた

ハ. 2人とも同じような気持ちだった

ニ. 夫より自分の方が、多少深刻だった

ホ. 夫より自分のショックの方が、はるかに大きかった

ヘ. 夫の気持ちまでは判らない

ト. その他 ()

7) この子が障害児だと判った時、御主人は、どんな心づかいをしてくれましたか。(あてはまるのを、いくつでも選んで下さい。)

イ. 一緒に、これからのことを話し合った

ロ. 妻をなぐさめ、励ましてくれた

ハ. しっかりするように叱って、自覚を促してくれた

ニ. 黙って見守ってくれた

ホ. さり気なく、心の支えとなってくれた

ヘ. 妻のことまで気がまわらないようだった

ト. かえって、妻に依存したがつっていたようだった

チ. その他 ()

- 8) 御主人の、この子に対する態度は、障害児と判ったことによって、それまでとどのように違ったと思いますか。
- イ. 少しも変わらず、愛情深い
 - ロ. 不安が強くなったようで、よそよそしくなった
 - ハ. この子が居なければよいとまで思うようになった
 - ニ. より一層、可愛がるようになった
 - ホ. もともと無関心なので、大して変わらない
 - ヘ. よく判らない
 - ト. その他（ ）
- 9) お母さん自身の気持ちは、障害児だと判ってどのように変わったと思いますか。
- イ. 子どもが可愛いことは、少しも変わらない
 - ロ. 将来への夢が消え、不安が増した
 - ハ. 子どもに対する思い入れが薄くなった
 - ニ. この子が不憫で、愛しさが増した
 - ホ. 人生の重荷に思え、憎らしささえ感じた
 - ヘ. 複雑で、言い表わし難い気持ちの変化があった
 - ト. この子が、より一層大事な子だと思った
 - チ. その他（ ）
- お母さんとお子さんが私どものグループに通うことについて、お父さんがどう見ておられたと思うかということに関して、答えて下さい。
- 10) はじめにグループに参加した時は、それを、どういう形で決められましたか。
- イ. 妻の独断で
 - ロ. 妻は迷っていたが、夫の決断で
 - ハ. 2人とも積極的に考えて
 - ニ. 2人とも迷い、色々相談して
 - ホ. 夫がむしろ、強力に後押しして
 - ヘ. 夫の指示で
 - ト. その他（ ）
- 11) 現在の御主人の協力度は。（お母さんがグループに通うことについて）
- イ. 妻よりも積極的で、何かと手助けしてくれる
 - ロ. 特に協力はしないが、関心は高い
 - ハ. 妻がたのめば、協力してくれる
 - ニ. 割と無関心で、協力しようとしない
 - ホ. 妻に代わって、自分が行きたがる
 - ヘ. 夫にとっては迷惑なようで、やめさせたがる
 - ト. はっきり、やめるとよく言う
 - チ. その他
- 12) お母さんとお子さんがグループに通うことは、お父さんに対して、間接的にどのような影響があったと思われますか。
- イ. 子どもに対する関心が高まった
 - ロ. お母さんのやり方に、口出すことが少なくなった
 - ハ. どことなく安心感が出来たようだ
 - ニ. 子どもや妻に対する理解が深まった
 - ホ. 別に関係なかったようだ
 - ヘ. “あなた任せ” 的になってきた
 - ト. よけいに不安が強くなった
 - チ. 言い争うことが多くなった
 - リ. その他（ ）
- 13) 夏の合宿や、クリスマス会などに参加することを、御主人は、どのように受け止めてみえるようですか。
- イ. 楽しみにしていて、もっと出席したがっている
 - ロ.それほど熱心ではないが、何か得るところがあるように感じているようだ
 - ハ. 積極的ではないが、イヤがってもいない
 - ニ. 行った方がいいとは思っているようだが、どこか気乗りしないみたいだ
 - ホ. 誘われることを迷惑がっている
 - ヘ. 自分で企画して、父親の集まりを作ろうとする程、気に入ったようだ
 - ト. その他（ ）
- 14) 御主人の参加を求めることについて、お母さん自身は、どうお考えですか。
- イ. 家族のまとまりのためにも、是非必要
 - ロ. 夫への刺激となり、自覚を促すためにも、その方がよい
 - ハ. どちらでも、あまり影響ない
 - ニ. 夫は迷惑がるので、どちらかといえば、しない方がよい
 - ホ. 家庭争議の元になるので、やめて欲しい
 - ヘ. その他（ ）
- 15) 御主人に参加してもらおう機会を作ろうとしている今のやり方で、まだ不備だと思われること、こうしたらよいと思われることで、お気付きの点がありましたら、何でも自由に書いて下さい。
-
- <C> 現在のお母さんの心境や、お父さんに対する気持ちについて、答えて下さい。

16) 現在、この子の存在は、お母さんにとってどのようなものですか。(あてはまるものを、いくつでも選んで下さい。)

- イ. 喜びの源泉である
- ロ. 悩みの種である
- ハ. 苦しみの原因のひとつである
- ニ. 家中の宝物である
- ホ. 心の安らぎである
- ヘ. 神の与えた試練である
- ト. 特に何でもない。普通の子と同じ
- チ. 良くも悪くも、家族の中心である
- リ. その他(上の項目で表わし切れないものを、下のスペースに書いて下さい。)

[]

17) 家族にとって、この子の居ることのプラス面にはどのようなものを感じてみえますか。(いくつでも)

- イ. 家族のまとまりがよくなる
- ロ. 家族みんなが人間的に成長できる
- ハ. この子が居なければ判らないような社会の一面に触れることができる
- ニ. プラス面は今のところ考えられない
- ホ. この子の居ること自体が幸せである
- ヘ. その他(何でも気付いたことを。)

[]

18) 御主人は、現在、家族に対してどういう立場をとろうと配慮してみえるように思えますか。

- イ. 育児・家事についても、負担を分かちもってやってくれる
- ロ. 育児・家事には、タッチせず、母親が専念できるように、もっと広い立場から配慮している
- ハ. 仕事に専念できるように、むしろ、妻の配慮を求めてくる
- ニ. 特に何も考えていないようだ
- ホ. 妻の機嫌をみながら、それなりの手伝いをする程度
- ヘ. その他()

19) お母さんとしては、御主人に、どのような配慮を心掛けて欲しいと思ってみえますか。(いくつでも)

- イ. できるだけ家に居て、相談相手になって欲しい
- ロ. しっかり働いて、経済基盤を安定させて欲しい
- ハ. 家族での娯楽や外出を多くして欲しい
- ニ. 家の中では、明るくふるまって欲しい

ホ. もっと、妻の苦勞、気持ちを判って欲しい

ヘ. 家事・育児を分担して欲しい

ト. 子どもへの接し方、訓練の仕方など、気付いたことをどンドン指摘して、導いて欲しい

チ. 今のままで、十分満足しているので、別に心掛けてもらうことはない

リ. 何かしてもらっても、かえって迷惑になるので、何もしてもらわない方がよい

ヌ. その他(何でも自由に。)

[]

20) お母さんが、お父さんに対して、現在考えていること、感じていることなど、ありましたら、何でも構いませんので、自由にお書き下さい。

[]

A GROUP-THERAPEUTIC PRACTICE WITH SEVERELY MULTIPLE-HANDICAPPED CHILDREN (5)

Fathers' Participation in Therapy Group

Shuji GOTOH, Eiji MURAKAMI, Yasunori MORISAKI, Reiko KATOH, Yuri NAKANISHI
and Hirofumi MIZUNO

A family with a severely multiple-handicapped child should be treated rather as an integrated family than as a pair of mother and child. From this view-point we talked with the five pairs of parents who participated in our group-therapeutic practice, and examined each case.

The fathers became motivated by the development of their children and the changes of their wives through this group-therapeutic practice and actively attended our practices.

The following five steps to facilitate fathers' attendance have been found:

(1) letting them to know growth of children, mental security of mothers, and repairment of their interactions, (2) orientating them to our practices, (3) giving them chances of attending our practices, (4) discussing our practice with them and enhancing their motivation for participation, (5) making chances of associating with each family.

The following three factors are presumed as the approach to the fathers. (1) Self-awareness of the father role. (2) Deeping their knowledge of role. (3) A chance to change their family dynamics. It seems that the fathers have become conscious of their existence as the father with a handicapped child through the association with other families and the contacts with the therapists. It also seems that the father's changes may have guaranteed their wives more mental security, too.

We came to the conclusion that fathers' participation activates and stabilizes their marital relationship and family dynamics, centering their handicapped children.